

さいほうとうしゆう

西鵬東鷺 — 洪庵と泰然

海堂尊

第一回

1章

鳳雛、覚醒す

文政八年（一八二五）

日暮れ時、橋の真ん中に、青年が佇んでいた。

土佐堀川に架かる、なにわ橋の上だ。

師走の街角を人々が気ぜわしく行き交う中、青年は、腕組みをし

たまま、動かない。

背は高く、頭ひとつ周囲から抜きん出ている。だが、がりがりに
痩せていて、風が吹けば、ぱたりと倒れてしまいそうだ。

水面には岸辺の柳が青々と映り込んでいる。その側を、魚の籠を
かついだ物売りが、売り声を上げながら通り過ぎていく。その声は、

異国の言葉のように聞こえた。

それは、故郷とは言葉の早さが違うせいかもしれない、と青年は
思う。

浪速は水の都だ。

太閤たいこう秀吉が建設した街には、水路が張り巡らされ、寄進した豪商の名がついた橋が架かっている。

橋の上から川面を見下ろすと、帆に屋号を書いた船や大小の御用船、土船、石船、屋形船や釣り船など、大小の船が忙しく行き来している。

「出船千艘、入船千艘」とも言われる。

江戸が八百八町ならば、浪速は八百八橋だ。

青年は橋が好きだった。

橋を渡れば、違う場所に行けるだろう。どこか、今とは違う場所へ。

元服を済ませたばかりで、月代も青々とした青年は、腰に差した大小の刀を、そっと撫でた。

始めのうちは誇らしかった腰の大小も、今となっては煩わしいばかりだ。そもそもその大小は竹光なので、単なる虚飾に成り下がっていて何の意味もない。

青年に、本物の大小は重すぎた。武芸は苦手だし、身体は弱い。自分は侍に向いていないのではないか、とつくづく思う。

青年には十ほど年の離れた兄・馬之助がいる。青年と真逆で武芸に優れ身体頑健、跡取りに相応しい兄は、父・惟因から一文字をもらい、惟正と名乗っている。

——兄上さえいらつしやれば、佐伯の家は大丈夫だろう。

『自分は必要とされていない』と考えて、うつむいていた青年は顔を上げた。

武士であること、貧しい藩士の三男坊であること、そんな自分の身にまとりついているなにかもが煩わしい。

浪速に出てきた最初の頃は、立ち並ぶ屋敷の豪壮さと、人の多さに目眩めまいがした。

故郷の備中足守とは違い、樹木が極端に少ない。土地はほぼ全て敷地に使われ、矩形くけいの細長い家が隙間すきまなく建てられている。街角に樹木はほとんどない。

例外は川縁かわべりで、そこには木が植えられている。だから青年は川が好きで、橋が好きになった、のかもしれない。

陣屋町じんやまちとは名ばかりの鄙ひなびた村の様子を思い出す。足守川に掛けられた小さな葵橋あおいはしを渡り、細い畦道あぜみちをたどって藩校に通った日々。武芸が苦手で何度、藩校に行くのを躊躇ためらったことか。

だが周囲の者の目が厳しく、脇道に逸れることなど考えもしなかった。

その藩校は、藩財政が厳しくなり、ほどなくして廃校になり彼はほっとしたものだっただけ。

ところが都会での生活は全く違う。自分がどこへ行こうと、誰も

気にしない。そんな感覚は、自由というにはほど遠く、どこか置き去りにされた感じがする。そんな感覚に戸惑うばかり。

けれども元服を終えたばかりの若武者には、戸惑いよりもときめきの方が勝っていた。

きつとなにかが始まる。

そんな予感に、浪速の街をあてどなく歩き回った。

目に触れるもの全てが、胸を高鳴らせた。

小藩である足守藩の勘定方の父・佐伯惟因は、藩の年貢米を大坂で売りさばき、藩の懐をまかなうのが仕事だった。

如才なく商人たちとも付き合ったが、父は青年には厳しく教えた。——金に引きずられてはならん。だが金をおろそかにするとしつぺ返しを食うぞ。

その父の教えは、幼い頃に論じられた四書五経と共に、青年の身に染みこんでいる。

だが父は金策の算段ばかりが能ではなく、歌会に参加して歌を詠んだり、古典の解釈を友人と談じ合ったりと、学識も持ち、風流の嗜みもあつた教養人だった。

そんな立派な父親の背中を見ながら、青年は育った。

この橋の上にたどり着く前、街角をそぞろ歩いてきた青年は、店先に並べられた和菓子の彩りに食欲をそそられた。だがそれが彼の

舌の上に乗ることはない。それを購あがなう余裕は青年にはなかった。

それでも食欲は我慢できる。

——どうにも我慢ができないのは……。

青年は顔を上げた。その先に、黒塗りの建物がそびえ立っている。

先ほどから青年は、橋の向こう側にある、その建物を凝視し続けている。
ていた。

医を志すなら合水堂。がつすいどう

今、医師番付の横綱よこづなに鎮座ちんざしているのは天下一の名医、華岡青洲はなおかせいしゅうだ。

紀州きしゅうの医家に生まれ、京きょうで古医方こいほうを学び、別の医家で外科を収め、諸家しよかと交わり研鑽けんざんを重ね紀州で開業した。

いにしえの漢唐かんとうの時代の古方こほうに蘭方らんほうの長所を加え独創の治療を創案さうあんし、秘薬ひやく・麻沸散まふっさんを用いて、乳がんや脱疽だつそなど、難しい外科手術を次々に成功させ、その名声は四海に響き渡っている。

今は故郷紀州藩きしゅうはんの侍医じいとなり、病院・医学校を兼ねた住居「春林堂しゆんりんどう」で後進の育成にも務め、そこに医を志す人々が日本中から集まり、在籍門弟ざんせきもんていは千を超えたという。

青洲の弟、華岡鹿城ろくじょうが、故郷紀州を離れられない兄に代わり文化の中心、浪速のど真ん中に打ち立てた新たな医の殿堂。合水堂は、橋を渡ればすぐそこにある。

だが手の届く所にありながら、そこはあまりにも遠かった。

青年が未練がましく見つめているとその時、合水堂の門が開き、小柄な侍が姿を現した。

数人の供が付き従っている。一行は橋を渡り、次第に青年に近づいてくる。

中心の四十代半ばの小柄な男性は、朱塗無反りの大刀を帯び、威儀を誇っている。

華岡鹿城先生だ、と青年は呟く。

兄・青洲と同じく八年間、京都に遊学し、古医方と外科を収めた。

文化元年（一八〇四）、彼の帰郷を待つて青洲は、通仙散を用い日本初の麻醉手術を行なった。

青洲と並び称される名医で気位が高く、豪商・鴻池から往診を頼まれ出掛けた際、正門ではなく横から木戸をくぐって入れ、と言われ、憤然と引き揚げたという逸話の持ち主だ。

「北岡、南岡に譲らず。北岡は鹿城、南岡は青洲」と町人に囃されたりもする。

最近、跡継ぎの男子が生まれ機嫌がいいらしい。

青年は、一步、足を踏み出そうとした。

——お願いがございます。私を合水堂で修学させていただきたく。喉まで出掛かったその言葉は、声にならなかった。

身体からだが動かず、立ちすくんだ青年の前を、華岡鹿城の一行は通り過ぎていく。

その後ろ姿を見送った青年は、肩をすぼめて橋の欄干らんかんから川面に視線を落とした。

自分がいつから医を志そうと思ったのか、そしていつからその願いを胸に封じ込めて生きていくようになったのか、青年は思い出せなかった。

「なんや、でかいなりをしておるくせに、しけた顔しとるなあ」

涼しげな声が響いた。振り向くと懐手かたしこうでをした男性が立っていた。乞食こじきと見紛うようなボロ着の出で立ちだ。

天下の往来で片袖かたそでのない着流し姿でいる人なんて、初めてみた。伸び放題の蓬髪ほうはつは毛の質が強いのか、立ち上がり、髪の毛団子の中に顔がある。路地裏ろじうらの神経質な猫が毛を逆立さかだて、しゃもじのような尻尾しっぽになった様を思い出す。

長いこと洗っていないような汚れた顔。だが不思議と不潔な感じはしない。とびきりの笑顔が顔からはみ出るように溢れ出て、汚れを洗い流しているのかもしれない。

青年の横に並んで、川面を眺めながら男は言った。

「ただ見ているだけでは、なんも起こらへんで。ほしいもんがあつ

たら、手を伸ばさな」

「私のほしいものが、おわかりになるのですか」

思わず青年は問い返す。男性はにっと笑う。

「そりやあな。さつきから小半刻もここに突っ立って、橋の向こうを眺めてはため息をついていれば、丸わかりや。おまけに恋い焦がれる片想いの相手が目の前を通っても、声も掛けられんとは、まったくヘタレやな」

片想い、という言葉に胸を突かれた青年は、むっとして言い返す。

「私が小半刻もここにいたことを知っていらつしやるということは、あなたも小半刻、ここにいらしたのですね。私が片恋かたこいに身を焼く小僧だとしたら、あなたは相当のひま人です」

「はっは。言うてくれるのお。けど、わてにひまはあらへん。頭ん中でいろんなものが滾たぎっていて、ぼんやりしとるヒマはない。わてはずうっと天下の一大事を考えていたのや」

「天下の一大事って、何ですか」と、思わずつられて青年は訊ねた。

すると男性は、足元の橋を、雪駄せったを履はいた足で、どん、と踏み叩いた。

「ええか、この大地は動いておる。そしてお天道てんどうさんの周りを回つとるのや。なぜそんなことが起こるのか、不思議ふしぎやろ？ それは万物ぶつには相引き合う力が働いとるからや。これを『引力』という。け

ど、一番びっくりなのは、みんなそのことを知らんで、毎日生きておる。これが天下の一大事と言わんで、何が一大事や」

その瞬間、時を止めたように、男の周りの空気が固まる。通り掛かった人たちが足を止め、大言壮語たいげんそうごをしている変わり者を見た。

だがすぐに、人々は思い思いの方へ歩き出し、止まった時が流れ出す。

青年は呆然ぼうぜんとした。あまりに突飛とつびすぎて、話についていけない。

「世界は大きい。ワテなんて蟻ありんこみたいなもんや。けどそんなワテの頭ん中に、この世の中のことがすっぽり入っている。森羅万象しんらばんしやう、万事お見通し、だから一步も動けんボンの考えなんて丸わかりや。けどボンはワテとは全然ちやう。ワテは考え事がようけありすぎて動けん働き者。ボンは足がすぐんで動けん、ただの臆病者おくびょうものや。ボンが憧れて目指そうとしているのは、鞍馬山くらまやまのてっぺんや。だが小さい小さい。わてはな、あの星を目指しておるのや」

そう言って、男は夕闇に沈む空に、ひときわ明るく輝く、宵よいの明星を指さした。

頭をがん、と殴られた気がした。

顔を上げた青年に、男は笑いかけた。

「はっは。ちいとはマシな顔になったな。それでええ。よっしや、ほしたらワテの弟子にしたる。今日はもう遅いから明日の正午、こ

の橋の上に来い。ええな」

そう言うと男は、風に揺れる風船のようにふらりふらりと、人混みに紛れていった。

夕闇の中、男の後ろ姿を、青年は目で追う。

——この大地が動いていて、しかもあのお天道さまの周りを回っている、だつて？

なんとこの大法螺おおぼらだろう。

だがそう思いながら、ふと気がつくとき、男が言うとおりに、自分をとりまくすべてのことが、バカバカしいくらい小さく見えた。

気がつくとき青年は大笑いしていた。

こんな風に腹の底から笑ったのは、一体いつ以来だろう、と青年は不思議に思いながらも、笑い声を止めることができなかつた。

そんな青年を、道ゆく人々が怪訝けげんそうな表情で見遣りながら通り過ぎていく。

なにわ橋の向こうにある合水堂は黒々とした影となり、相変わらぬの威容いようを誇っていた。

けれどもそれまで感じていた、胸にのしかかるような圧迫感は消えて去っていた。

「父上、ただいま戻りました」

青年が挨拶をすると、初老の父・惟因は相好そごうこうを崩した。

「遅かったではないか、惟彰これあきら。夕飯が出来ておるから、一緒に食べよう」

惟彰はうなずいて父に従い、新築の家の木の香りが漂う居間に入った。

薩摩堀中筋町にある屋敷は、新設された足守藩蔵屋敷だ。

父・惟因が責任者に抜擢されたのに伴い、惟彰も浪速に連れられて一緒に来た。

四四歳の時に出来た孫のような惟彰を、父・惟因は猫可愛がりした。

幼名を騏せい之助のすけとしたのは、牛の群れの中においても、騏牛あじうじ（赤牛）ならば自然と目立ち頭角を現すという、論語にある逸話に拠ったものだ。

そこに父の期待と愛情が見て取れた。

だが惟彰は三男なので、佐伯ではなく、縁がある田上たがみせい姓を名乗らせた。

備中足守藩主の木下氏は秀吉の正室ねねの実家という血筋だ。外と様大名で二万五千石、領民は一万七千の小藩である。

父の惟因は足守藩士・野上のがみ家の次男に生まれ、十三歳の時、佐伯家の養子になった。

十五歳で御蔵方筆算見習いで出仕し、以来五代の藩主に仕えてい
る。

弱小藩の財政の切り盛りは大変だ、と散々聞かされていた。

特に難儀したのはお国替えの時だった。

惟彰が生まれる九年前、参勤交代の時に起こった不祥事にて、当
時の足守藩の総石高の七割以上となる二万二千石余が、福島県の陸
奥国伊達・信夫両郡内の貧しい瘦せた領地と交換され、実質的に所
領半減となった。

結果的に不祥事に乗じて、肥沃な土地を幕府直轄地の天領に組み
込み、上がりの悪い土地を弱小藩に押しつけるという、峻厳な処分
となった。

この財政難のため藩校がお取り潰しになるなど、教育も不十分で、
惟彰は家で父から、当時の学問の基礎である四書五経など、基本的
な素養を学んだ。

当時、そしてそれは今もだが、数年にわたる天明の飢饉で幕府の
財政は行き詰まり、藩の米収益は下がっていた。おまけに武家は江
戸、大坂で贅沢な生活を覚え支出が増大した。

これに対し足守藩は、年貢を先取りして、そのツケを領民に回す
という悪政に走った。

父・惟因は財務担当の御元方として後始末を押しつけられ、江戸

や大坂で金策に東奔西走し、大坂の豪商から千両の借財をまとめてなんとか収まりをつけた。

惟彰が八歳の頃である。

父の留守中に惟彰は、兄・馬之助と共に痘瘡に罹り、一時は死にかけている。

こうした功が評価され二カ月前、父は大坂の薩摩堀中筋町に新設された足守藩蔵屋敷の初代大坂留守居役の大役に就いた。

そうして惟因は、元服したばかりの惟彰を連れて、大坂蔵屋敷に入ったのだった。

だが弱小藩の悲しさ、父子の生活は困窮を極めていた。物価の高い浪速では一層苦勞したが、難儀なことは顔に出さず淡々と対応する父を、惟彰は常に尊敬のまなざしで見っていた。

父が、元服後に田上惟彰と名乗れと告げたのは、佐伯の家では養えぬ、という通告だった。

だが数代前の先祖一代限りで途絶した家名である田上家には何の実態もない。

惟彰は、遠い祖先が名乗っていた緒方という姓も選ぶことができず、けれどもどちらも行き詰まりの袋小路のような名である。そんな状況を冷静に俯瞰する惟彰は、十六の青年にしては老成した観がある。

貧しさと不安定な暮らしは、子どもを早熟にさせてしまうものなのだろう。

一汁三菜いちじゆさんさいの食膳しょくぜんを眺めながら、惟彰はさつき出会った男について、父に話した。

「この大地が動いている、などと荒唐無稽こつとつむげいなことを本気でおっしゃるのがおかしくて」

だが風流人で学もある惟因は、その話を笑い飛ばさなかった。

「その話は昔、聞いたことがある。あれはどこだったかな」

父は風流人で教養も深く、交友関係が広がった。その父も知っている話となると、法螺話ではないのかもしれない。

惟彰は、先ほど橋の上で声を掛けられた男と、交わした約束を思い出す。

さつきまでは行くつもりはさらさらなかったけれど、急に気が変わった。

それは袋小路で行き詰まっている惟彰の前に現れた、新しい橋なのかもしれない。

そう思った。

翌日。

律儀に正午前に浪速橋のたもとにいと、ほどなくして昨日の男

が現れた。

人混みの中から遠目にその姿を改めて眺めると、異形振りいぎようぶりは一層目立った。

継ぎ接ぎだらけで片袖のない服は、もはや服と呼べる代物ではなく、単なる布きれだ。

雪駄をじやらつと鳴らしながら近づいてきた男は、よつ、と片手を挙げた。

「約束の時間通りやな。感心感心。まあ、ついてきなはれ」

惟彰は言われるがまま、男についていき、見慣れた路地を進んでいく。

やがて京町堀の近く、坂元町に着いた。

「あそこや」と男が指さしたのは平屋の町屋だった。

「くすり」と書かれた幟のぼりが、軒先のきりではたはたと風にはためいている。惟彰はおかしくなって、くすくす笑う。

男はむっとした口調で言う。

「なんや、あんまりにもボロい家やから、笑うとるのか」

「そうではありません。私の住まいは、ここから八町（約八百メートル）ほどの薩摩堀中筋町にある蔵屋敷なのです。あまりにも近いので、なんだかおかしくなってしまうって」

「薩摩堀中筋町の蔵屋敷と言うと、最近できた足守藩のお屋敷やな」

「ええ、父が足守藩の勘定方の仕事をしているので、連れられてきたのです。お師匠さんはお医者さまだったのですね」

「まあ、医者のような、医者でないような……」

そう言つて、男は肩をすくめた。

「弟子として、入門する師匠の名を知らないのは、いかがなものか、と思うのですが」

すると男は、うちわ団扇のように広がった髪をぼりぼりと掻きながら、笑つた。

「おお、これはうっかりしてたな。ワテの名はなかなまき中環。天游てんゆう、と号する。天に遊ぶ、ちうことや。どや、楽しそうな名やろ」

そう言いながら、がたがたと引き戸を開けると、「今帰つたで」と声を掛ける。

家の中は奥が広く、土間には縁台があつた。そこに町人の男性が座つており、袖をたすきでからげた女性が、けたたましい勢いで話しかけている。

太っている、というほどではないが、なかなか貫禄がある女性だ。

「あんさん、うちが出したせん煎じ薬を飲んでまへんな。それでは病やまいは治りまへんで」

へえ、すんまへん、と大の男が身を縮めて、小声で言う。

女性は側に控えていた、四つか五つくらいの子どもに言う。

「耕介、葛根湯を三包、出してやりなはれ」

その幼な子は「あい」と答え、小さな抽斗ひきたしがたくさんある箆筒たんすから包みを取り出した。

「すんまへん、今度は必ず煎じて飲みますさかい、かんにんしてや」
「かんにんするもなにも、あんさんの身体ですよって、飲まな、ようならんだけのことや」

小さく頭を下げた男がそそくさと部屋を出て行くと、ちようど天游とすれ違った。

女性は天游を見ると、大声で言った。

「あんた、また仕事もせんとふらふらしとったんやな、はよ、手伝いなはれ」

「いや、ワテは医家を名乗ってはおるが、見立ても薬の調合もどうてい、さだには遠く及ばん。ワテはお前の仕事ぶりを、ほればれと見るのが仕事や」

「調子のいいこと、言いなさんな」と言いながら、女性の表情は満更でもなさそうだ。

さだと呼ばれた女性は、天游の隣に佇んでいる惟彰に気がついた。
「あんた、また若い子を拾ってきたんかいな。猫の子やないんやから、ええ加減にしいや」

憎まれ口を利いたさだだったが、惟彰を見る目は優しい。

「あーあ、背ばっか高くてひよろひよろやないか。せっかくの男ぶりが台無しやで。ちようどええわ。診察がひとくぎりついたから、お昼にしましょ。あんさんも食べていきなはれ」

お齒黒の口元をほころばせて、女性が言うと、天游がうなずく。

「奥方のお許しが出たから、遠慮せんと食うていけ」

惟彰は初めて訪れた家で食事のご相伴に預かるなんて図々しすぎるな、と恐縮しながらも、ひどく空腹だったので、申し出をありがたく受けることにした。

焼き魚の香ばしい匂いが部屋に満ちた。

台所で干物の魚を焼き上げると、さだは大きな飯櫃から手際よく椀に盛り、食卓を四人分、並べた。

白く輝く米はつやつやしている。惟彰はごくりと唾を飲み込んだ。蔵屋敷では腹いっぱい飯を食べたことがない。気がつくとき惟彰は干物を頭から嚙り、そして銀シャリを掻き込んでいた。

菓運びの手伝をしていた幼な子は夫妻の実子で名を耕介といった。彼も師匠の天游も、同じような勢いで、競うようにして食事を平らげた。白米を頬張りながら、天游が言う。

「このボンは、浪速橋のたもとからのほしそうな顔で、合水堂を一刻も眺め続けていたのや。な、医者になりたいのやろ」

「一刻ではなく半刻ですが、医者になりたいというのは本気です」

「そんな細かいことはどうでもええがな。それより、ボンの名前を聞いてへんかったな」

弟子入りを許し、飯まで食べさせておきながら、今頃になってようやく名前を聞くなんて、なんて大雑把おおざっぱで適当な師匠だろうと、惟彰は可笑おかしくなった。

だが気がつくと思わず語りで、自分の身の上まで話していた。

「私は田上惟彰と申し、兄がふたり、姉がひとりおります。長兄は幼くして亡くなり、年が離れた次兄は元服して惟正と名乗り、家督を継ぐことになっております。私には父が昔、御用を果たすときに使った『田上』姓を名乗らせ、自分の名にある『惟』の字をくださったのです」

するとさだが言う。

「医者になるなら、惟彰は縁起のええ名や。昔、緒方春朔しゆんさく先生という人痘術の名医がいらしてその名が惟章や。お父はんもあんさんに、医者になってもらいたいのかもしれへんなあ」

さすがにそれはないだろう、と思いつながらも、驚いた惟彰は言う。

「実は縁があり、私は緒方の姓も名乗れるそうなので、どうやら父はどちらにしようか、迷っていた節があるのです」

「それなら、名医にあやかって『緒方惟章』に名前を変えなはれ」

さだは猫の子に名前をつけるような気軽な調子で惟彰に言う。す

ると天游が言う。

「名前は呪のろいや。同じ名前にしたら、緒方春朔先生を超えることができんようになる。姓は緒方でええとしても、名は変えよう。どういう字を書くのや？」

惟彰が自分の名を宙に字を書いて説明すると、天游はしばらく腕組みをして考えていた。

やがて顔を上げると、満面の笑みを浮かべて言う。

『惟』は親父さん譲りやけど、佐伯の家は継がへんならこの字はいらんやろ。それと名医にあやかって『彰』の字も変えてまえ。うん、

『章』あきの方がすっきりして断然ええわ」

父を尊敬している彼にとって、父譲りの字を取れ、というのは乱暴すぎてびっくりした。

だが、父が田上姓を名乗らせたのは、父から離れて独り立ちせよ、ということだ。

すると名を変えることは、父の意に添うことになるのかもしれない、とも思った。

そうなると不思議なもので、新しい名は、新たな船出に相應しい、という気にもなってくる。

話をしているうちにいつの間にか「田上惟彰」は姿を消し、「緒方章」が話し始め、その言葉に天游とさだが耳を傾けていた。息子の

耕介はどこか上の空で、ぼんやり宙を眺めている。

庭先から師走の弱い陽射しが射し込み、部屋を包み込んでいる。

食事を終えると、天游は章を書斎に連れていき、書棚から冊子を抜き出した。

「その本には、この大地は地球という名の星で、お天道はんの周りをぐるぐる回っている、ということが書いてあるのや」

ぱらぱらと頁をめくった惟彰は顔を上げた。

「これは蘭書のようなですね。残念ですが、私には全く読めません」「せやろ。その本は京都で出会った師匠に、それまでの訳本がおかしいので、改めて訳し直せと命じられたものの原本で、オランダのルロフスの『天文学』ちう本や。ワテは京生まれやが若い頃、蘭学を学ぶために江戸、長崎、京都といろいろな土地をめぐり歩いたのや。長崎ではちいともええことがなかったのでさっさと引き揚げたけど、江戸では知り合いがようけでけた。おおつきげんたく大槻玄沢先生の『芝蘭堂』にも一年ほど通ったで。亡くなる時には師匠に見込まれ娘を娶めとって後を継げ、と言われた。その師匠の娘が今の家内や。さだの父上は海上随うながみずいおう鷗という、京都では名の知れた蘭学者やったのやで」

それから天游は、書棚から別の本を取り出した。

その書を見た章は目を輝かせた。

「これは『解体新書』ではありませんか。実物を見たのは初めてですけど、図譜が見事ですね」

頁をめくりながら章は感動で震えた。

オランダの解剖書「ターヘル・アナトミア」を、杉田玄白、前野良沢、中川淳庵、桂川甫周りようたく なかがわじゆんあん かづらがわほしゆうといった、当時の気鋭の蘭学者たちが共訳した「解体新書」は、今や町人にも知られている名著だった。

食い入るように本を眺めている章に、天游はいたずらっ子のような笑みを浮かべて言った。

「それはちやうで。ワテが蘭学仲間の斉藤方策殿ほうさくと訳した『把而翕湮（パールヘイン）解剖図譜』や。そしてその素晴らしい銅版画の挿絵は従弟の伊三郎いさぶろうの絵で、そこは本家本元の『解体新書』を超えているのや。うちの書棚には蘭書が二冊、訳本が十冊もあるで。その本の『引力』は、どないや？ 読みたくてうずうずしてくるやろ」「ええ、是非読みたいです。でも、悔しいけれど蘭書の方は、何が書いてあるのやら、さっぱりわかりません」

「まあ、せやろ。けど、ワテの『思々斎塾ししさい』に入れば、それが読めるようになるのやで。さだの父上は、フランソワ・ハルマちう仏人が書いた蘭仏辞典に和訳して、蘭語辞書を作った。ここには全十七巻の『波留麻和解ハルマ』、通称『江戸ハルマ』がある。それがあれば蘭語が読めるようになって、最先端の蘭医学も学べる。ほしたら合水堂

なんぞ恐るるに足らず、や。な、ええことづくめやる？」

明るい顔になった章は、晴れやかな声で言う。

「それが、鞍馬山のてっぺんではなく、星を目指すということなんですね」

「せや。けど、だからといって合水堂を舐めたらあかん。あつこの親分は青洲先生の弟の鹿城先生、手術の腕が凄く漢方を使いつつ蘭学も取り入れる折衷派、『内外合一、活物窮理』という華岡青洲先生の教えを体現している貪欲な傑物けつぶつや。ボンは貧乏な小藩の御家人の三男坊、家督も継げない無駄飯食い、合水堂のばか高い月謝は払えんやろ。ならばワテの『思々齋塾』で蘭学一本でてっぺんを取ればええ」

怒濤どとうの中天游の言葉に、惟彰は押し流されていく。だが章の目の前が突然、ぱあつと明るくなり、道が拓けた気がした。

天游は惟彰のために、蒼天に輝く星を指し示してくれているのだ、と感じた。

「でも、入塾は難しいです。金子がありませんので」

「お代は出世払いにしとくから、とりあえず入塾してまえばええのや。ボンはいい目をしとる。絶対に大物になるで」

褒められたことよりも、謹厳実直で生真面目な父の教えからは想像もつかない、いい加減な入門勧誘に、章は驚いてしまった。

けれども深く感激した章は礼を言い、辞去じきよしようとした。
すると、さだが前掛けを外しながら言った。

「せつかくやから、道修町どしゅうまちへ買い物にいくついでに、新しいお弟子
はんを送っていくわ」

そう言ったさだは、章の答えを待たずに、そそくさと出掛ける支
度を始めたのだった。

道々、さだは途切れることなく、よく喋った。

「ほんま、あて外れもええとこや。お父はんが見込んだ一番弟子や
って、あても嫁いだんやけど、ちいとも働かず朝から晩まで、天文
の本ばかり読んどる。医学にはあんま興味がのうて、せつかく病院
を作っても、全部あてに丸投げや。おまけに蘭学塾を開いて、海
のほんとも山のものともわからん若い者を集めて講義しとる。ほんに
困ったことに、そんなとこだけはお父はんこそつくりや」

そう言いながらも、さだはちつとも困ったような風には見えない。
章が言う。

「奥さまのお父上はお医者さんだったそうですね」

「せや。海上随鴟は京都ではちいと名の知れた蘭医で蘭学者やった。
ひとり娘のあては、塾生にお姫さま、と呼ばれとったのに、今はこ
のていたらく。西宮にしのみやで医業を開いたけどあんまり流行はやらず、浪速に

来たのや。こっちは人が多いから、患者も多くてなんとかなつとる。
文化十四年に開業したから、もう九年になりまんな」

それは八歳の章が、六歳上の兄と共に痘瘡（てんねんとう天然痘）に罹って死
にかけた頃だ、と思いながら、章は顔を赤らめて大柄の身を縮め、
小声で謝る。

「そんなこととは露知らず、大食らいしてしまつて、すみませんで
した」

さだは、にこにこ笑う。

「かまへんかまへん。若いもんは大人に迷惑を掛けて大きくなるも
んや。それにうちの人があてに掛けとる迷惑と比べたら屁の河童や。
ま、それでもうちの人の才能はピカ一やで。そこはあても揺らいだ
ことはない。それにうちの人が、人を見る目は確かや。あんさんは
きつと凄い学者になるで」

「お会いして一日しか経っていないのに、そんなことがわかるので
すか」

「もちろんや。京都一の海上塾で、若い塾生をようけ見てきたから、
ひと目で才能はわかる。あんさんはうちの人とあてのお墨付き、自
信を持ちなはれ。でもな、いくら蘭医学が優れているとゆうても、
実際の治療は漢方が主体や。あんたもいずれ自分の食い扶持ぶちを稼
がなあかん。蘭学もやりながら、あての医業も手伝つて学ぶとええ」

「是非、教えてください」

素直な章の返事を聞いて、さだはにっこり笑う。

「まあ、散々悪口は言うてもうたけど、そんなもあては、うちの人は天才やと、他の誰よりも信じているのや。ほんとにやになってしまうくらいええ加減な人やけど蘭学と天文学に関してだけは真摯や。昔、長崎の偉い学者はんが訳した『求力法論』や『曆象新書』が、書写を重ねていくうちにええ加減になりすぎたんで、お父はんがうちの人に改訳をさせたくらいの一番弟子や。自分では蘭語はあまり得意ではない、なんて言うけどあれは謙遜やで」

「大地が動いていて、お天道さんの回りを回っている、という例のお話ですね」

因みにその書物は十七世紀末、万有引力の概念を打ち立てたアイザック・ニュートンの自然哲学原理書「プリンキピア」を、弟子筋のオクスフォード大学教授のジョン・ケイルが学生用に解説した「引論」で、オランダのルロフスが蘭訳した「物理学および天文学入門」だった。

その和訳に注釈を付けて刊行したのが長崎の高名な蘭学者・志筑忠雄の「曆象新書」である。

もちろん今の章にそんな知識はない。

天游は志筑の誤訳を正し、新たに「引律」という訳書を著した。

天游は、志筑が「求力」とした用語に対し、今日も使われる「引力」という造語を初めて使っている。

「せや、あれはうちの人の十八番おはこで、あれを道端で講釈すれば投げ銭も稼げる、なんて言うてる。ま、稼いだ金は全部飲み代に消えてまうけど。けど師匠としては間違いないピカ一やで。若い頃は江戸で大槻玄沢先生の『芝蘭堂』で学び、京都ではあてのお父はんから大絶賛や。今は浪速の蘭学の親分、橋本宗吉先生の『絲漢堂』しかんどうに入塾し、漢方と折衷の名医で『藍塾』あいの斉藤方策先生、各務文献先生、かがみぶんけん伏屋素狄先生ふせやそてきが集まり定期的に勉強会も開いとる。うちの人についていけば間違いあらへんで。『磨けば珠は光る』いうんがお父はんの口癖やで、うちの人を見習ってのんびりお気張り」

やつぱり天游師匠は自分の未来を広げてくれる橋だったのだ、と章は改めて、天游と出会えた僥倖ぎょうこうを噛みしめた。

そんな章の肩を、さだは、ぽん、と叩いた。

「せや、お母はんと離れて暮らしとるなら、あてを浪速のお母はんと思つて何でも言いなはれ。塾生はあての子どもと思とるので、遠慮はいらへん」

そう言いながら、章が大坂にまだ不慣れだと知ったさだは、浪速の街の中心地、船場せんばについても、歩きながらいろいろ教えてくれた。

「船場は東は東横堀の西岸、南は長堀の北岸、西は西横堀の東岸、

北は大川と土佐堀川に沿う区画で、浪速のど真ん中や。南北に狭い二十尺の『筋』が走り、東西に二十六尺の『通り』で、それぞれに名前がついとる。歌で覚えるのやで」

そして「北に過書今橋浮世高麗伏見、道修平の町淡路瓦町」と歌うように言った。

そうこうしているうちに、やがて道修町に着いた。通りに入った途端、漢方や香のような匂いが、ぶん、と鼻をつく。

高麗橋通りより三筋目のこのあたり、五、六町の間はすべて薬種の問屋が軒を連ねている。

大勢の客が行き交い、通りに面した店先には、荷造りをした藁屑や縄切れが散らばり、前掛け姿の小僧たちが忙しく荷ほどきをしている。その側を、売り子が声を上げながら、通り過ぎていく。他にも畳屋、たんす屋、墨屋の集まりも見え、ここでも売り声が響き、大層賑やかで活気がある。

道修町の発祥は太閤秀吉の時代に遡るが、「薬種仲買株仲間」として公認され、薬問屋の町として整備されたのは八代将軍吉宗の時代である。

吉宗侯が病んだ時、道修町の薬が大層有効だったので、仲買仲間百二十四軒を公認し、仲買寄合所を作った。その際、和薬問屋の数は二十軒と厳定された。制限が厳しく新たな株仲間になるのは並大

抵のことではない。だが時代がくだり蘭方が盛んになるにつれ、周辺に取り巻くように新規の薬問屋ができ始めていた。

「この街には和漢の薬種が揃って、その真贋しんがんも質してくれとるし、上品と下品もよりわけてくれる。薬は乾ほしたり刻んだり、塵ちりを取り除いたりと手間が大変や。真贋も見分けにくく贋薬も横行しとる。買い占めやボロ儲けをやる、悪どい薬屋連中も少なくないのや。だからお上かみはここ、道修町で吟味ぎんみ識別してからでない、他で薬を売れないようにしたのや。せやから本気で医業をやりたいなら、いい薬屋はんと昵懇じつこんになっておくことが大事なんやで」

さだは章に説明しつつ、薬問屋の店先で漢方薬を買い求めた。

旧知の薬問屋の手代てだいと世間話をしながらも、注文によどみはない。何軒か回った後で、道修町からやや外れた瓦町の店に足を運んだ。

「大和屋やまとやはん、今日は新しい弟子を連れてきたで。今後もよろしう」
まだ若い手代が、前掛けで手を拭きながら店先に出てきた。

「ほう、背の高い立派な御仁ごじんでんな。さだ先生のお弟子さんなら、有望でんな」

章は黙って頭を下げた。隣でさだは注文を口にする。

「セメンシナ、ヂキタリス、ゲンチアナを一斤きんずつ、それと人参、地黄じおう、肉桂にくけい、丁字ちやうじももろうとこうかな」

漢方蘭方とりませたさだの言葉は、初めて聞いた異国の歌のよう

に、章の耳に響いた。

両手いっぱい薬の包みを抱えたさだは「ほな、また明日な」と言っ
て、賑わう人混みに紛れていった。

長身の章は、さだの後ろ姿が見えなくなるまで、見送った。

天游と出会って、わずか一日と少しで、「章」の人生は大きく変わった。
った。

この日、天命の師の引力に引き寄せられ、鳳凰ほうおうの雛ひなは覚醒したの
だった。

かくして緒方章は侍の身分でありながら医師を志したが、これは当時の常識ではあり得ない選択だった。医師は士農工商しのうこうしやうの身分制の中では「方外ほうがいの徒」（世捨て人）とされ、呪術まがいの陰陽師や儒者と同等の扱いを受け、しかもそれよりも一段低く見られていたからだ。例外の藩医は世襲せしやう制で、中央の幕府では大僧都だいそうず、法眼ほうげんなど、僧侶の位で呼ばれていた。

そして医師を志すのは貧しい農民で一旗揚げひととはたようという気概のある青年が多かったのだ。

だから藩医でもなくいっばしの侍の家の者が医師を志すなど、常識外れの行動だったわけだ。

当然、父の惟因も始めは難色を示したが、切々とした章の願いを聞き入れる形になった。

このことは終生、章の引け目として残り続けることになる。

当時、幕府は国学として朱子学を奨励していた。これに伴い医学も朱医学が基本だった。

ところが十七世紀後半、儒の世界に伊藤仁斎じんさいが出て、復古運動に励んだ。これに伴い、医学も中国の唐代前に戻れとする「古医方」

が起こった。その中心となったのは、後漢の張仲景ちやうちゆうけいが著したとき
れる「傷寒論」しやうかんろんであり、現実的な症例の集積により医の理ことわりを解き
明かそうというものだった。そして今の漢方はそうした「古医方」
が主流になっていた。

そこに全く次元の違う蘭医が殴り込みをかけた形になっている。
その象徴的な存在が、長崎で盛名せいめいを誇ったシーボルトの鳴滝塾なるたきじゆくで
あり、そこには蘭医学を修得しようという意欲と野心が溢れる人材
が蝟集いしゆうしていた。

そこには、新たな医の胎動が強く感じられた。
とにかく章はこうして、自分の道の第一歩を歩み出していた。

旧暦五月、初夏の風が吹き渡る中、初鯉はつがつおの売値が景気よく跳ね上
がり、売り子の声が華やぐ。

緒方章が天游の「思々齋塾」に通い始めて半年が過ぎた。

そんなある日、章は、上下かみしも袴かみしもの改まった正装姿で「思々齋塾」
を訪れた。

前日、師・天游に、「明日はええとこに連れてったるから、きちんとした服を着てこいや」と言われたからだ。

よれよれの礼服は父の袴を借用したものだ。

少し悩んだが、腰には一応、竹光の二本差しを帯びている。

天游もその日は珍しく、きちんと装っていた。といっても、継ぎ接ぎがなく、袖がある服を着ていた、というだけなのだが。

糸の切れた風船が漂うように、ふらりふらりと歩く天游の後ろを、章がついていく。

天游の塾に通うようになった章は、さだのお使いもしていた。紙に書かれた薬を買っているうちに自然と薬の名も覚え、薬問屋とも知り合いになった。

章は、蘭学は天游に、医学はさだに学んでいたわけだ。

西横堀川にしよこほりがわに掛かる尼崎あまがさきの小橋を渡ると、いつもはここで右に折れ、薬問屋が立ち並ぶ道修町に向かう。

だが今日はそのまま真っ直ぐ行くようだ。

左手に土佐堀川を見ながら五つ、角を過ぎると過書町かしょまちだ。梅檀木せんだんのみ橋はしの南詰みなみづめの一画で、三十石の発着地に生えた梅檀の木には、神功皇じんぐう后ごの御還ごかんの時に船を繫いだのでこの名になった、という言い伝えがある。しばらくいくと門構かどがまえも仰々おつよおつよしい、立派な屋敷が見えてきた。

席むしろをかぶせた大人車だいはいちべんくるまが次々にその屋敷に吸い込まれていく。

「ここは銅座どうざいうて勘定奉行かんじょうぶぎやう、長崎奉行ながさきぶぎやう、大坂町奉行おおさかちょうぶぎやうが仕切っておる。天領の大坂でも格別、特別な場所なんやで。主な荷は日本中の銅山どうざん、特に別子銅山べつしどうざんから運ばれてきた荒銅あらいどうを集めて精錬し、棹銅さおどうに

して長崎に送り、オランダ貿易の支払いに使うのや。その余りを商人に払い下げるんやけど、住友家が仕切る銅吹屋どうふきやが利を取っておる。お隣は『懷徳堂』かいとくどうゆうて、町人のための学塾や」

天游の説明を聞いた章は、過書町は浪速の文化の中心地なのだな、と理解した。

銅座の軒先には、これまで見たことがない紋をつけた段幕が張つてある。

最近、少しわかるようになった蘭文字の紋は、「V O C」と読めた。

中天游は勝手知ったる様子で、ずかずかと銅座の屋敷の一階の部屋に入り込む。

章がついていくと広間には、数人の男性が西洋風の椅子に座つていた。

としかき
年嵩で、総髪の男性が片手を挙げる。

「天游はん、遅かったがな。間もなく対面が始まるという触れがあったところや」

秀でた額で、ぎよろりと大きな目をした老人は、猫背だが表情は若々しい。

天游が言う。

「宗吉先生、ご無沙汰しとります。けど、まだ対面が始まってへんのやったら、ワテは遅れたわけではあらへんやろ。むしろいい塩梅あんばいや

ありまへんか」

「相変わらず、屁理屈へりくつが達者やな。ところでお連れつれの立派な若武者はどなたはんや」

訊ねられて天游は、章を振り返る。

「浪速一の蘭学者、『絲漢堂』の橋本宗吉先生がお尋ねや。章、自己紹介せえ」

章は背筋を伸ばし、一礼する。

「天游先生の弟子、緒方章と申します」

「そうでっか、ひとつよろしう」と橋本宗吉は気さくに言った。

六三歳の橋本宗吉は大坂の傘屋の紋書き職人だった。その異才を見込まれて大坂の蘭学者・間重富はざましげとみと医師・小石元俊こいしげんしゆんが留學費を出し、江戸の大槻玄沢の「芝蘭堂」に留學させた。

すると宗吉はたった四カ月で「江戸ハルマ」に載っていた六万語のオランダ語のうち四万語をたちまち暗記して大坂に戻り、ふたりのパトロンを欣喜雀躍きんきせつやくさせた。

その後は医学、薬学、本草学ほんぞうがく、天文、地理、伝記、化学の蘭書を次々に翻訳し、寛政八年（一七九六）に医業を始め、南船場に蘭学塾「絲漢堂」を開塾した。

誰もが認める、浪速蘭学の巨魁きよかいである。そんな橋本宗吉の周りには浪速の蘭学の俊英しゆんえいが集い、一大サロンを形成していた。

天游も宗吉門下の一員で、その中でも突出した俊英と認識されていた。

すると橋本宗吉の隣の、重々しい風体で威厳ある年配の男性が、にこりともせずと言う。

「拙者は『藍塾』の斉藤方策と申す。天游殿とは以前、翻訳をご一緒させていただいている。以後、お見知りおきを」

『この方が師匠と一緒に解剖の教科書を翻訳した先生か』と思いつつ、師匠の天游よりも年配に見える大家に、四角四面で丁寧すぎる挨拶をされた章は恐縮して頭を下げる。

「今日は各務文献殿はお休みか」と天游が言うと、斉藤方策が声を潜めて言う。

「おとつい、刑死場けいしばから新しい死体を手に入れたそうで、忙しいそうだ」

「ええ加減にしとかんと、そろそろ見つかって、お咎とがめを食らいかねんぞ」

橋本宗吉がそう言うと、斉藤方策が首を横に振る。

「いえ、その点はさすがにぬかりがないようで、近々、木彫りの骨格標本が出来上がるから、それを幕府に献上するのだとおっしゃっておりますぞ」

ぼんやりと宙を眺めていた天游がぼつんと言う。

「床下に腑分けした人骨を積んで、学びたい時に好きなだけ取り出せるなんて、ほんま羨ましいでんな」

「それも、出来た奥方が全面的に協力しとるおかげやろう」と橋本宗吉がうなずく。

話題の人物は、公儀の許可なしに腑分けをやっているのだと悟り、章は肝を潰した。

世間話がひと段落したところで、章は師の天游に小声で訊ねる。

「ところで今日のこの集まりは、何なのですか？」

すると天游の隣の斉藤方策が、ぎよろりと目を見開いて、低い声で言う。

「天游殿、お弟子をお連れになっておきながら、本日のこの集まりについて説明もなさっておらんとは、あまりにも粗忽そこつなのではありませんか」

「悪い悪い、うっかり忘れとったわ。長崎は日本でただ一箇所、外国との交流が認められている特別の地や。そこでは清国しんとオランダの人たちが住んでおる。そして長崎から年一回、役人が来て、ここに泊まる。そして四年に一度、オランダ商館長が江戸参府さんぶをするんやが、その時の宿舎にもなる。今日は蘭学者がいろいろ質問できる、滅多にない機会や。しかし、ワテも粗忽やが、章もいかん。ここに来るまで、目的も聞かんなんて、気が利かなさすぎや」

章も、隣の斉藤方策も、その無責任な物言いに唾然あぜんとして、天游を見た。

話を逸らすように天游が、人差し指を唇に当てて言う。

「しつ、静かに。会談が始まりそうや」

襖かすまの向こう側で、人の気配がした。

しばらくして二階から下りてきたらしい袴を着た役人が姿を現した。

二本差しではなく一本刀だ。町人かな、と章は思う。

「お待ちせしました。カピタンとの対面が始まります。みなさん、

お二階へどうぞ」

みんな一斉に立ち上がり、ぞろぞろと階段を上っていく。章は一番後ろだ。

並べられた椅子に座ると、やがて部屋の襖が開き、三十年代と思いき青年ふたりの後から六十代の年寄りがひとり続いて入ってきた。

最後に、大柄の異人が姿を現した。二十代と思いきその青年は、身の丈六尺を優に超えて、カラフルな異国の衣装を着ていた。

きびきびした所作しよばで着席すると、異国の青年の背後に三人の日本人が付き従う。

天游が小声で言う。

「章、よく見ておけ。あの異人さんがシーボルト先生だ」

フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの名は、当時の日本では鳴り響いていた。

章は改めて、長身の青年を見た。

背が高い章よりも、更に一段高い。

細い眉は凜々しく秀でた鼻、尖った顎。溢れんばかりの才気が迸っている。

よく見ると、頬に刀傷のようなものがあり、それが精悍さを加えていた。

その目は眼光鋭く、周囲を一瞥した。

その視線の前では、全ての虚飾が剥ぎ取られてしまうような、そんな気がして、章は身震いがした。その佇まいは医師、というよりは侍のように思われた。

天游が隣の章に囁きかける。

「実はオランダから日本にやってくる医師は未熟で、腕を磨くための見習い気分の者が多いと言われとる。でも聞くところによると、あのシーボルト先生は、オランダの医学界でも名門の出で、将来を囑望されているそうや。それで幕府も特別の思し召しで、鳴滝というところで医院と医学塾を開かせておられるそうや。とにかく、破格のお方やで」

本当はシーボルトはドイツ人なのだが、ドイツ人の入国は許され

ていないので、オランダ人ということにして滞日している。だがそんなことは、日本人は誰ひとり知らされていない。

オランダ通詞も、シーボルトのドイツ訛りのオランダ語が妙だと感じてはいたが、方言の一種の「山オランダ語」だという説明で納得してしまっていた。しかしオランダは平野の国で、山などない。そんな行き当たりばつたりのことを信じてしまうのだから、当時のオランダとの付き合いには、どこか抜けているところがあった。

シーボルトの右隣に控えた男性が言う。

「拙者は鳴滝塾生の塾頭、高良斎と申します。隣に控えるのは、やはりシーボルト先生の高弟の二宮敬作と申す者。本来であれば大通詞の末永甚左衛門殿が応接するところ、昨日より体調を崩されており、我々が対応させていただきます。みなさんは蘭語に優れていると存じますが、形式的に質問を拙者か二宮がシーボルト先生にお伝えする形とさせていただきます」

「では早速」と頭領の橋本宗吉が口火を切った。その質問は、蘭書の文言の解釈に関わるものだった。それに対するシーボルトの回答は簡にして要、ムダのない見事なものだった。

そんな風に質問を投げ、それに対する答えを通詞を介さず理解している浪速の蘭学者たちを見て、章は自分もいつかこうなりたいたいものだ、と思った。

さまざまな主題に関して行なわれた対談の中で、その日一番注目を集めたのは、シーボルトによる種痘術しゅとうの手技しゅぎの手ほどきだった。

種痘とは痘瘡、現在で言う天然痘に対する予防法である。

三十年前、英国のジェンナーという町医者が、牛痘ぎゅうとうに罹ると人の天然痘に罹らないで済む、ということを経験的に証明した。その後、牛痘を使った種痘は欧州に広がり、今ではすっかり一般の予防法になっっているのだという。

八歳の時に罹った章は、痘瘡の恐ろしさをうつつすらと知っていた。しかも自分が、日本の人痘術の第一人者といわれる緒方春朔の名前にあやかっているかもしれない、と教わったばかりの章にとって、種痘術は興味を惹いた。人痘法とは、痘瘡には重症化するものと、軽微で終わる二系統があることから、軽い症状の手法を人工的に接種して罹患りかんさせ、痘瘡に対する免疫を得るという方法で、南宋から伝来した医術だった。

橋本宗吉が代表して、口を開く。

「日本では清国伝来の人痘法が行なわれておりますが効果は思わしくなく、接種にて痘瘡を発症してしまうという、本末転倒なことも起こっています。それでも人痘法に頼るしかなかったので、牛痘を得られたらどんなにありがたいことか。是非、ご尽力をお願いいた

します」

宗吉の言葉に、シーボルトはうなずいた。

「わかりました。牛痘の種はバタビアにありますので、貿易船で運ぶよう手配しましょう」

そして、持参した種痘用のランセットを用いて、デモンストレーションをして見せた。

居合わせた浪速の蘭医たちは、わずかな所作をも見逃すまいと息を詰め、シーボルトの手元に目を凝らした。

やがて、質疑応答がひと段落すると、天游が隣の章に囁いた。

「どや、日本語で構わへんから、なにか質問してみいへんか」

一瞬たじろいだ章だが、この大地が動いているのだということをおえば、そんなためらいは些細なことだ、と思い直し、勇を鼓して口を開いた。

「シーボルト先生が医家として心がけていることがあれば、初学者の私に御教示ください」

側に付き添った高良齋が身をかがめ、耳元で蘭語に訳す。シーボルトは微笑した。

「医を志す若者が、医師の心がけを知ろうと思うのは素晴らしいことです。大切なのは、患者第一に考えることです。それには偉大な医家、フーフエランドの著書を学ぶといいでしょう。私は、『死ヲ善

クスル為ニ賢ク活キヨ』という言葉ざゆうを座右めいの銘めいにしています」
章の胸に刺さったその言葉は終生、彼のきんかぎよくじょう金科玉条きんかぎよくじょうとなった。

対談を終えて部屋を退去したシーボルトは先日、江戸の長崎屋で質問をした若者を思い出していた。江戸の青年の印象は、浪速の若者と真逆だった。

同じ医学を志しながら、正統と異端、体制と反体制の対照が際立っていた。

だが同時にふたりの日本の若者に、新たな才能ほうがの萌芽ほうがも感じた。
『日本の未来は明るい』とシーボルトは、晴れやかな表情で確信した。

そして、これから浪速の蘭学者に依頼あいますることと相俟あいまって、彼の胸を高揚させた。

シーボルト以前にも、きちんとしたオランダ人の医家の指導者はいた。

「解体新書」を和訳した一員である、当時三八歳の中川淳庵と、その友人で將軍の侍医を勤める二六歳の桂川家四代当主・桂川甫周あんえいは、安永五年（一七七六）、江戸の長崎屋に滞在していた上外科医カール・ツェンベリーの元くんとうに足繁く通い、親しくその薫陶くんとうを受けている。

植物学の大家、カール・リンネの弟子として有名なツェンペリーは二人に目を掛け、梅毒の水銀水内用ばいどく すいぎんすいはいようや外科器具の用い方を伝授し、二人は師事した証明書をもらい、大喜びした。

だがシーボルトほど熱心に、しかも実際の治療を見せつつ医学を教えた人物はいなかった。

彼は、蘭人は出島に幽閉されるといふ規則を変え、長崎郊外の鳴滝の地に病院を開設し患者を診療し、医学塾の鳴滝塾を開き、門弟を集めて医学教育を施した。

貴賤きせんの分け隔てなく、近隣住民も治療したので、住民からも絶大な支持を得ていた。

そして彼は、診察たきしたお滝という女性を見初めた。

出島は女人禁制なので、彼女を遊女あそびめということにして出入りさせた。

そのために彼女は花町そのぎで其扇そのあふぎという源氏名も持ち、二人の間には女の子が生まれた。

その女の子は後に日本初の女性産科医になる楠本くすもとイネである。

当時の蘭学界は江戸・京都・大坂に限られ、桂川、杉田、大槻、宇田川、小石といった代々続く名家に支えられていた。だが鳴滝派の出現によって、名門の出自でない者もシーボルトに学んだことで高く評価された。

この時の江戸参府に同行した伊東玄朴いとうげんぼくという若い医師は、そのまま江戸に残り蘭学塾と医院を開設し、好評を博しているという。

文政九年（一八二六）、シーボルトの名声は天よりも高く、四海に響き渡っていた。

そして蘭学界の地殻変動ちかくが蠢動しゅんどうし始めていたのである。

*

帰り道、緒方章は興奮した口調で、師・天游に話しかけた。

「あのように、蘭人と直接話をできる機会は、よくあることなので
すか？」

天游は、章がすっかりやる気になっているのを見て取って、にっと笑う。

「蘭人が江戸参府するのは四年に一度やけど、宿も銅座と決まってるし日取りもわかるから、あらかじめ質問をようけ準備しておくのや。百冊の本を読むよりも勉強になるで。けどそれには蘭書を読めるようになっておかんといかん。それと、オランダ商館長が上府する際、行きに浪速に寄った時に通詞に蘭書を注文すれば、江戸に持参した本の残りや江戸で売っている蘭書を入手できる。それがこれや」

そう言って、天游は手にした風呂敷包みを持ち上げてみせた。

「今回はツイておった。欲しくてたまらんかった、『ゴルテル内科書』をようやく手に入れたで。まずはワテが読むが、天游文庫に入れておくから、終わったら章も読めばええ」

章の胸が高鳴った。章は先月、ようやく最初の本を半分まで読み終えたばかりだ。

これで天游文庫には原書が三冊となり、辞書の「訳鍵」も含むと、訳本が二十冊所蔵されている。今日、天游が手に入れた原書を、章が読めるのは、はるか先になるだろう。

聞けば長崎通詞には脇荷わきにという特権があるという。お上の交易の他に、商館員に容認された私的な売買があり、そこで蘭書を安価で入手し、高価で売り抜けて財を成すのだという。

「江戸参府の行き道の道中の滞在では、江戸に行けば必ず売れるから、通詞も強気で値を下げないが、帰りは江戸で売れ残った分だから投げ売りになるので値切りもできる。それで今回、ようやく手に入れることができた、いうわけや」

「なるほど、それはようございましたね」

師弟がそんな会話をしていると、後ろから声を掛けられた。

振り返ると、散会后、しばらく部屋に残っていた橋本宗吉が笑顔
を浮かべていた。

「天游はん、そこのお茶屋でお茶でもいかがかな、いや、鱧はもにはまだ少し早いので久方ぶりに、まむしにしまひよか」

「へえ、喜んでご相伴しますが、師匠が新しい蘭書を手に入れた時にお食事のお誘いとは、珍しいことがあるものでんな」

「実は、面倒な事を頼まれてな。そのことでちと相談したいのや」

大賑わいの鰻屋うなぎに入ると、離れに座を取った。

章は初めて食べる鰻に夢中になった。

そんな章の様子を、孫を見る祖父のようなまなざしで宗吉は見た。

実際、天游の弟子である章は、宗吉にとって孫弟子にあたるわけだ。

食事が済んで膳が片付けられると、宗吉は改めて天游に言う。

「実はこれを模写して清書してほしい、と頼まれてな」

抱えていた紙包みを卓上に開くと、それを見た天游が驚きの声を上げた。

「なんと……これは蝦夷地えぞちの地図やおまへんか」

「せや。ご禁制もんや」と宗吉は、周囲を見回しながら、声を潜めて言う。

しげしげと地図を眺めた天游は言う。

「土地の和名とオランダ語が並べて書かれていますな。お上がわざわざ蘭語を記すはずがない。ということとは協力者がおりまんな」

「大方、鳴滝塾の連中やろうな」

「なんで、そんな妙なことを頼んできたんでっしゃろ」

天游が当然の質問をした。

「どうもシーボルト先生が、この禁制の地図を持ち出そうとしていることを幕府の役人が嗅ぎつけているようなんや。その場合、これはお返ししなくてはならない、だがどうしても蝦夷の地図は持ち帰りたい、というので、万が一のための複製を準備しておきたいそうや。だから、できるだけ早く、しかも隠密裡に、という条件つきや」

「それはまた、大層なお話ですな。もしこのことが露見したら……」

そう言う天游の顔を見て、宗吉は腕組みをした。

「そうなんや。そこで天游の意見を聞きたい、思うてな」

どないしよう、とその目が問いかけている。

中天游は目を閉じた。彼にしては珍しく眉間に皺しわを寄せている。

やがて目を開くと言った。

「お師匠はんが、やれ、おっしゃるならワテが引き受けまひよ。徒弟の伊三郎は絵が達者ですし、アイツなら秘密も守ってくれます」

「実は儂わしもひそかに伊三郎殿をあてにしていたのや。やってくれるか」

「期日はどれほどですか」

「少し急ぎで、一月ひとつきだそうだ」

「わかりました。なんとかやらせましょう」

「ありがたい。シーボルト先生が江戸の蘭医学者への土産に訳した蘭薬の冊子をいただいた。先ほど、仲立ちをしておった高良齋と二宮敬作の二人が訳したそうや。まずは天游に渡しておく。書写を終えたら、清書した蝦夷地の図と一緒に返してくればええ」

受け取った冊子をばらばらと流し読みした天游の頬が紅潮する。「ほう、『薬品応手録』おうしゆろくでっか。蘭方薬の新しい知識がたっぷり盛りられていますな。さぞかし、さだが喜ぶことでしょう」

続いて師匠から手渡された冊子を眺めた章は呆然とする。

ジギタリス、ベアドンナなど、さだが時折注文する品もちらほら見えたが、スチルラ、海葱かいそう、ヒオスチャムスなど、これまで聞いたことのない薬名も列挙されていた。

「まったく、蘭医学の進歩は日進月歩ですな」と天游が言う。

宗吉が続ける。

「それだけではない。対談でも聞いた、牛痘の種痘術について、將軍に直訴して種をバタビアから輸入できるよう、取り計らうそうだと実現したら真っ先に長崎と浪速なみせに分苗ぶんびょうしてくださると確約してくれた」

「そうとあってはこの依頼は、何としても果たさねばなりませんね」

興奮した口調で言う天游の横顔を、章は黙って見つめていた。

だがやがて意を決したような表情で、口を開いた。

「お師匠さま、僭越せんえつながら、言わせていただきます。私は、この頼み事は引き受けるべきではないと思います」

「なんや、お上のお咎めが怖いんか」

章は首を横に振る。

「違います。きまりに従わないのはよくないからです。日本人も知らないであろう蝦夷の地図を、異国の者に渡すのは、道理が通りません」

橋本宗吉の顔がかすかに歪ゆがんだ。

気に病んでいた、痛いところを正論で突かれたのだろう。

その様子を見た天游は懷手をして、言った。

「半人前のクセして、師匠を批判するとは生意気や。破門はもんされてもええんか」

章の足元がぐわり、と揺れた。

けれども、きまりは守るべきだ、と章は頑なに思った。

緒方章は天游に向き合った。その目を正面から見据える。

「私は、自分の考えを曲げたくありません。お師匠さんたちは間違えていると思います」

すると天游は、いともあっさりと言う。

「よう言った。ならば章、お前は破門や」

目の前に拓けていたはずの未来が、いきなり暗黒の岩戸に閉ざされてしまった心地がした。

その後、どうやって家に帰ったのか、章は覚えていない。

父にも挨拶せず、蒲団ふとんに潜り込んだ章は、ひそかに枕を涙で濡らしたのだった。

*

それからの章は、生きた屍しかばねのような日々を送っていた。

憔悴しょうすいしきって食も細くなったが、父はなす術もなく、ただ見守るしかない。外では熊蟬くまぜみが喧しく鳴いているのに、足守藩蔵屋敷の中は、御通夜のように静まり返っていた。

やがて風が涼しい秋になり、鈴虫の音が聞こえ出した、そんなある日。

「ごめんやす」と、よく通る女性の声が蔵屋敷に響いた。

「章、お客さんだ」と父に言われ、誰だろう、と思いつつ章は玄関に顔をだした。

すると玄関に立っていたのは天游の妻、さだだった。

「なんで医院にこないのや」と章の顔を見るなり、さだは言った。

章は、消え入りそうな声で言う。

「お聞きになつていないのですか。私は師匠に破門されたのです」
情けない声でそう言う章を、さだの雷がいっかつ一喝した。

「なに言うてまんの。うちの人がどうしようよと、そんなの関係あら
しまへん。あては章を首にしとりまへん。せやさかい、今からさつ
さと仕事しにきなはれ」

一喝された章は、しぶしぶ家を出た。鉛なまりの鎧よろいを身にまとつたか
のように重い身体を引きずり、さだを追う。やがて、懐かしい「思々
齋塾」が見えてきた。

戸口のところで、片袖のない服を着て腕組みをした男性が立って
いる。

師・天游は、章の顔を見るなり言った。

「ずいぶん長いこと、さぼつとつたな。この遅れを取り戻すのは大
変やで」

「でも、私は破門を申し渡されてしまいましたので……」

章がしょんぼりと言うと、天游は高笑いをした。

「はっは、ワテのようなええかげんなもんが言いつけた破門を本気
にするなんて、まったく章は馬鹿正直のあほボンや。ええから、遅
れた分をさつさと読むがよろし」

章は言われるまま、書齋に向かう。部屋に入ると墨の香りと書物
の匂いが、ぶん、と漂つてきた。懐かしさと愛おしさに、思わず涙

しそうになる。

拳でぐい、と目頭を拭うと、読みかけの蘭書を取り出し、辞書で語句を調べ始めた。

そんな章を、天游とさだが離れたところから、そつと見つめていた。

日が沈み、書を読むのが難しくなった頃、ようやく章は顔を上げた。

——私は、本当に学問が好きなのだ。

改めて自覚した章は立ち上がる。そして師・天游とさだに挨拶をして、辞去した。

その晴れやかな後ろ姿を、師匠夫婦は、門口に佇んで見送った。

さだが言う。

「どうせ許すつもりなら、始めから破門にしなくてもよろしかったのではありまへんか？」

「いや、そうもいかんかったのや。なにしろ禁制に触れる仕事をしたことがバレたりしたら、どんなお咎めがあるか、ようわからんから破門したんや。あの仕事は終わったからもう大丈夫。それにしても章のヤツは大したもんや。破門されると知りつつ、己の信念で筋を通したんやからな。ああいう一刻者いっこもんは、大切にせなあかん」

「あんたは、ほんに章が大好きなんやね」

さだのその言葉には答えず、天游は家の中に入った。

夕暮れの風が、浪速の街角を吹き抜けていった。

*

破門を解かれた章は、以前に増して一層熱心に勉学に励んだ。

一年が過ぎた頃、足守藩の厄介事が起こり、父は帰藩することになった。当然、章も大坂を去らなければならない。

天游とさだの前で、章は畳に両手をつけて頭を下げた。

「このたび父上が浪速を去るため、お暇いとますることになりました。短い間でしたが、お世話になりました」

天游とさだは顔を見合わせた。天游が言う。

「なんや、蘭学を途中で放り出すのか？」

「悔しく思います。しかし父の仕事の都合ですので、仕方なく」

天游は、天井を見上げてため息をつく。

ややあつて、章を見つめた天游は言った。

「よう考えろ。章は故郷に帰れば三男坊の穀潰おこぼしや。けど親父さんはものの道理がわかる、立派なお方のようなや。理を説けば、章の好きにさせてくれるかもしれんで」

「理、とはなんでしょう」

その問いには答えず、天游は問いを返す。

「章、お前ははどうしたいんだ？」と師に問われ、章はとっさに答えていた。

「お師匠さんのところで学び続けたいです」

「そんなことは言わんでも、ようわかっとなる。その先どうしたいか、を聞いとるのや」

章はしばらく考えて、言う。

「学を成し、世のためになることをしたいです」

「今の章がそうするために、一等の早道はなんや？」

章は、天游の傍らに座っている、さだを見た。

「……医師になること、です」

「それや。その気持ちを文にして、ぶつけるのや。そしたら、父上もわかってくれるはずや」

章の目の前に一瞬、道が拓けたような気がした。

だがすぐにうつむいてしまう。

「仮に父が許してくれたとしても、私は浪速で生活する糧かてがありません」

天游が声を張り上げる。

「章は常識に囚われすぎや。道は求める者の前にしか現れん。章に

は道を自分で切り拓こうという気概はないんか」

「でも……」となおも煮え切らない章に、さだが言う。

「でかい図体をして、こんまいことを悩みなさんな。浪速で暮らし
ができません、やて？ そんならウチに住まえばええ。なあ、あんた、
せやろ？」

「その通りや。遠慮することはない」

「どうして私なんかに、そこまでしてくださいさるのですか？」

『私なんかに』、なんて言い方したらあきまへん」とさだが一喝し
た。

天游がうなずいて、妻の言葉を引き取る。

「ワテも若い頃は、さだの父上の家に住まわせてもらっておった。

今度はワテがその恩返しをする番や。章は真っ直ぐで、誰よりも世
のこと、人のことを考えることができるヤツや。だからもつと大き
うなつて、高く飛び立ってほしいんや」

うつむいた章の、握りしめた拳の上に、涙が一滴、こぼれ落ちた。

章はその場で、医を志したい気持ちを綴った手紙を書き上げた。

そして言う。

「私は必ずここに戻ってきます。その時はまた、お世話になります」

天游とさだは微笑した。

半年後、父は足守藩に、章の大坂留学の許しを請い、認められた。そうして章は大坂に戻り、天游の家に寄宿させてもらうことになった。

そこは終生、章にとって、浪速の家になった。

一緒に住んでみると、師匠の天游は、本当に朝から晩まで読書に励んでいた。

学問的な指導は特にするとはなかった。

蘭書を自由に読ませ、塾生の疑問に答えるという形式を取った。

章は塾頭じゅくとうとして、師匠の代講をするまでになった。

中家の生計は医業で成立していたが、それは妻のさだに丸投げしていた。

「ワテは、これまで誰も知らなかったようなことを、知りたいだけや」

妻のさだは、ワテにはもったいないおなごや、と天游は真顔でのろける。

さだも、憎まれ口は叩くものの、天游が勉学に励むのを邪魔しようとはしない。

若い章にとって、そんな二人は理想の夫婦に見えた。

——私もいつか、さだ奥さまのような妻をもらいたい。

そんなこと思ってはみたが、口にはできなかった。

章は、師匠夫妻に見守られ、思う存分、勉学に励んだ。

蘭学を学ぶ毎日は楽しかった。

「頭の中では何を考えてもええのや」と天游は言う。

お上のため、成すべきことを成せ、と父に言われて育った章は、

初めは戸惑った。

だが次第に、肩が軽くなり、息が楽になっていく。

ここは、空気が軽い。

ある日、天游がぼつんと言った。

「ワテは、『フレイヘイド』というものを、何よりも大切に思っているのや」

『フレイヘイド』って、どういう意味の言葉なんですか？」

「日本語にはまだない言葉のようなんやが、とりあえず『自由』と訳せばええかな」

天游が口にしたその言葉は、突風のように章の心を吹き抜けていった。

ああそうか、今の自分が『自由』ということなのかもしれない、と章は噛みしめた。

天游の志は、章のこころの隅々まで染み渡っていった。

だがその頃、長崎ではふたつの大嵐が吹き荒れていた。

ひとつはオランダに帰国する帆船はんせんを破壊した自然の嵐。そしても

うひとつは、人々が巻き起こした「シーボルト事件」という大嵐だった。

だがそのことが浪速に伝わってくるのは、この少し後のこととなる。